

解題 『示現流聞書喫緊録』

村山 輝志*

Explanatory notes “Jigen—school Kikigaki Kitsukinroku”

Terushi MURAYAMA*

Abstract

This book was written in about 1780 by Kinoyukihide-Kubo. The text of the book explains the method of innocence and skills.

The book explains that the expression “innocence and skills” is a simile taken from Confucianism, Buddha and Shintoism.

The book explained the relations between the method of innocence and skills and Buddha.

This theory was expected to contribute to the understanding of people who make a special study of Budo.

キーワード 1. 月船君 2. 無念無想 3. 鉢羅奢佉

一、本解題を書く目的は、後述する武道の相伝書の内容を解説し、武道の研究者に供するためである。原文は、漢文体であるので、これを通訳したものである。内容は儒教、仏教、神道の要句を譬喩として当流の心・技法を説いたものであるが、本論では、三者のうち仏教の要句と当流の心・技法との関係を述べたものである。

『示現流聞書喫緊録上、中、下巻』¹⁾以下『喫緊録』と『示現流聞書喫緊録附録系図』²⁾以下『喫緊録系図』は久保七兵衛紀之英が天明元(1781)年に書いたものである。同書は『日本武道大系』³⁾に所収されている。

久保は同書の末尾に「『喫緊録』三冊を述べ系図一冊を附録し、終りに一首を詠ず」と書いているので『喫緊録』を上、中、下巻の順に書き、最後に『喫緊録系図』を書いたものと思われる。『喫緊録系図』のあとがきに本書は当流二代・重

方^{まさ}以来は名のみを羅列していたので後代の弟子のことも書き残すべきと思い寛政元(1789)年11月に完成させたと述べている。この間「虚泻」という病気を患っていたとのことで長期間に亘って本書を完成したと思われる。つまり『喫緊録』と『喫緊録系図』は流祖・東郷重位までは、天明元(1781)年に書いていたが二代・重方以降、六代実昉までの『喫緊録系図』は寛政元(1789)年に完成したことになる。

『喫緊録』を書いたのは、示現流修行者が流儀の心・技法をよく理解するためであり、さらに又、後世のために当流の意地(当流の極意に通ずる多くの筋道、過程)を明らかにし、長く流儀の正統を伝えるためであると述べたうえで、本書は、当流の根本であり、奥義は幽玄、深遠である。それで常人は、この書を解説することはむずかしいが、人間の本性に根ざした書であるので、この書

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

を悟れば流祖の境地になることができる。今は、この書を熟読する外に意地を悟る方法はない。意地を悟ることは、技の妙用も知り、独りで修行して妙用を得るに至る書である。初段、二段のことを載せているが、おのずから三段と四段の骨子もこの書にあると述べているのである。

本書を「聞書」と名付けたのは、本書に一季に聞く、一月に聞く、一日に聞く、一瞬目に聞くと記してあるからであり、聞くというのは心に自得することをいうのである。初段、二段の打を伝授され、この「聞書」の巻を授けられ、巻の中の意地を聞き、当流の意地を会得することをいうのである。

『喫緊録』の内容は、当流の『兵法書』⁴⁾『兵術察見』⁵⁾、『兵法切紙』⁶⁾その他などの伝書の解説書である。特に『兵法書』を中心に解説している。

解題として、本論を述べる理由は、文字通り『喫緊録』の内容が少しでも理解されることがのぞまれるからである。

解題を書くにあたっては、すべて『喫緊録』を翻刻し、これを解説したのを引用した。したがって特別に引用文としての「括弧」をつけなかった。しかしその他からの引用については、すべて「括弧」をつけ、文献名を明らかにした。

二、『喫緊録』の上中下の三巻のうち、上巻は、前文において示現流の名義の成立の過程や本書に述べられている「聞書」の意味を述べ、本文では当流の本体ともいふべき心法を述べている。

心法とは、譬喩の語句で「汀江放船」「三才」「二橋」「二字」で表現し、いずれも無念無想になるべきことを四つの語句で説いているのである。

中巻は、人間が善悪の業因によって行きめぐむ六つの世界である、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上に太刀の柄の握り方をたとえて説いている。

下巻は、初段＝立・双・越。二段＝寸・満・煎の六打の心・技法について説いている。

『喫緊録系図』は当流の伝系をまとめたものである。流祖を天真正自顕流の十瀬与三左衛門尉長

宗とし、次いで金子新九郎を経て赤坂弥九郎政雅、通称・善吉和尚に伝えられ、東郷重位は善吉和尚から皆伝をうけたとしている。重位は上洛し、善吉和尚に入門するまではタイ捨流を修行していたが、自顕流の皆伝を受けた後、薩摩藩でのタイ捨流師範であった東新之丞と藩主・島津家久の前で立合いをし、これを破り、御家流となったのである。そして儒学者で僧侶の文之和尚（弘治元・1555-元和6・1620）により「示現流」と改名された。このことについては詳細に後述している。その他、東郷重位の武芸修行のことや伝承のことを紹介しているが、つまるところ当流は「無念無想、月船君」の味で対戦するので他流よりすぐれているとしているのである。

後半は師範職を継承した東郷家と弟子達の修行状況を当流五代の実昉まで紹介している。当流の系譜を理解するには好書といえる。

以上が、本書のあらましであるが、これを別な視点から述べると次の通りである。

第一は、当流の本体あるいは源は四序である。序というのは、当流の本体で四つの本体があるという。つまり「汀江放船」「三才」「二橋」「二字」である（上巻）。本体は心でもある。心というのは空であるので一物があれば、それは心とはいわない。心が空であって一物もないことから、光が生じ、物を照らすものである。この光に向かうものは目をそらさないものはない。これを心光というのである。このような心や、光を生じさせるには、柄持、時割、打、目付によって磨くのである。四序の内容を根本とし、上記の四つの教えで磨くのである。一物が心にあるのを意識という。意識を捨て、そして心が空になった時、柄持、時割、打などの方法を会得した打ちの技ができ、目付が十分に養われてはじめて相手との格段の差が生じるとするのである。

第二の六道は柄の持ちかたを譬えて説き、強剛な振りや打って止まない技を示している（中巻）。当流の太刀の柄持ちに六つの段階があって、仏教の六道になぞらえて、その意味をとって柄持ちの技と意地を教えさとしている。この教えに従ってこれに習熟すれば、太刀の柄を握るとすぐ自分の

左右の手と同様に体の一部となる。9寸5分の太刀でも広野で用いて、技に応じられないことはなく、三尺の太刀でも小座敷で使って敵を殺さないことはないのである。

第三は時割である。これは「時を割き味を悟る」のことで、打つ時の足の動き、間合いスピードを示したものである（上巻）。当流では人の脈搏が一鼓動する間に足の動きが二足半歩移動することを敵に向かう寄足の基準とする。二足半とは二歩半のことであり、二足半の間数を二間三尺とする。この間を雲耀のように飛行し、特に終りの一步は一間以上飛びこんで、体を開き、敵の変化に応じて自由自在に打ち倒す技を会得する。体は腰をすえて、縄を張るように体を伸ばして、脈一鼓動の間に二間三尺飛んでいくのである。当流上手の技は脈一搏の間に二歩半を飛行し、敵を打ち倒した後、脈が二搏するのである。

寄足の教えに習熟しようと稽古する時は、座敷に台を置き、庭に立木を立て、又は俵を横に置き、一人稽古で三間の間を二歩半、進んで打つようにする。そうして普段の稽古では敵を二間三尺前後置いて、すっすつと五歩六歩、近ずいて打つようにするのである。

第四は、聖賢、段位を示し、品位・階梯を説き（上巻）、修行の順序と打の方法（中巻）である。当流には、現代武道と同じく段位と称号がある。段位は、初度、両度、初段、二段、三段、四段の六階級に分け、称号は、初学、学士、賢、聖、君子の五種である。初度が初学、両度が学士、初二段が賢、三四段が聖、段位はないが君子のみの称号がある。

さらに各段位に天台宗で心術を修め、悟るのに四門があるが、四門の有を初段、空を二段、非有非空門を三段、亦有亦空門を四段に配置している。そして各段階毎に三種ずつの技を計12種配置し、各技三種の技に相通ずる技名をつけ、各々の技には譬喩の語句を引用して奥義を説いている。

段位を設けた理由については次の通りである。当流の奥義は書きあらわしがたい味である。儒、仏、神の三道書より、当流の意地や譬喩すべき要句を抜き、この句に意地を託し、その階梯を示し、

階梯を得て堂に登り、室に入ることは、その人の器量にある。しかしながら師が綿密に弟子の器量を選び、打と意地を授けると述べている。

第五は目付の心・技法である。

目付とは、現代的にいうと周囲に存在する物の全体をみて構え、弱点がどこにあるか見破ることである。このことは対人的な動作においては時間、空間などを正しく認知して相手の動作を予知することと同義である。したがって運動を効果的に遂行するための重要な要因となる。

当流では、目付の心法を見、観、蛙、中道の語句から説いている。

見は、意識のない心のことである。したがって身の主人である心を下人の意識が使用してはならない。この意味は見は心を動かさずにみることである。つまりここでの心は、意識によって工が働いていないので無念無想の状態であり、太刀を打つときの状態である。ただ物理的に物の遠近、黒白を知るのみであり、これを遠えず分別するだけであるので心がみるのと同じである。これだけのことで本体の心を使うのは敵の方へ使うようなものであり、太刀が遅れる。心を散らさぬことが大切である。

観は、物を隔ててみることをいう。目にはみえないけれども、心眼でみれば、千里の間も一瞬のうちにもみることができ。ましてや三尺の的にあつては猶更のことである。

蛙の目付は、蛙は動くものをすぐみる。蛙は世間を眼にして自分の眼を世間にする、敵が動くところを自分の眼と心得ているのである。というのは蛙の眼は常にあいているが目を使わずに目の際により、動くものをみつけてぱつとたべる。他の生きものの眼は、自分の眼を動かして物を見つけるが、蛙は目を動かして物を見つけることはない。自分の眼は動かないが、動くものがあれば早く目にかかるのである。当流でいえば敵のこぶしが動くのをすぐに激しく打つ、これを蛙の目付という。蛙は全体をみているように見えるが、しかしみえていない。そのかわり、ある一瞬の動きを関知する能力がある。

中道とは、言葉や意味（志）以外のことをみる

ことである。二つの対立を離れた普遍にして中正なる道をいう、見、観、蛙の目付にとらわれず、これらを越えた普遍にして中正な目の使いかた、心のくばりかたと思われる。たとえば、敵のこぶしをねらって切れれば、有であるので遅く、又ねらわずに討てば、無であるので無明(迷いの根源)となる。

三、以上は、本書に述べられている大概の内容である。汀江放船の意地を理解し心を悟り、技を熟達する順序になっている。しかしまた、技から意地を悟る道もある。まず柄持、時割、打、目付の四つは技であるので、この奥義を求めて意地に至るのである。この技のなかに汀江放船、三才、二橋、二字、月船、鉢羅奢佉等の意地がすべて存在するのである。

以上のような心・技法を修行者が理解しやすいようにたとえ話しをとりだし、説いている。前述したが当流の奥義は文章に書きあらわしがたい味であるので儒道、仏道、神道の三道の書から当流の意地を譬喩するため、要句を抜き出し、この句に意地を託したと述べている。法華経では、種々の譬喩や因縁話によって、すぐれた能力のあるものを理解させるために物語を展開させるものがある。代表的なものに法華七喩がある。つまりあらゆる衆生が仏智と一体となり、成仏できる主旨を種々の面から喩えたもので、一喩だけでなく各方面から種々の譬喩にことよせて種々の能力と修行境地の異なる弟子達を指導するものである。これは格別に納得させる意図があったからである。当流も、法華七喩に影響されたとみえて種々の能力と修行境地の異なる弟子を、聖賢の称号と四段の別に分け、各段毎に種々の譬喩をことよせて説いている。

さて、法華七喩は、次の七つの譬喩のことである。(1)火宅喩、(2)長者 窮子喩、(3)薬草喩、(4)化城喩、(5)衣珠喩、(6)髻珠喩、(7)医子喩、この中の(1)火宅喩は本書と関係しているので後述している(他は紙面の関係で解説を略す)。本論では、儒、仏、神の三道のうち仏道から譬喩の語句としてとり出し、当流の奥義を述べた内容について解

説するものである。解説する方法は、仏道の語句の意味と当流の奥義と譬喩の語句との関係についてである。解説するのは次の通りである。

(1)示現、(2)鉢羅奢佉、(3)四門、(4)六道、(5)三毒、(6)左譬切断、(7)三千大千世界、(8)火宅を出る、(9)重類、傍布、(10)入星、仏心、見顕

その他、仏道の語句である「不立文字」「直指人心」「見性成佛」「教化別伝」「寂然不動」などは「左譬切断」のなかで紹介した。

しかし上記以外にも多くの仏道の語句があったが略した。例えば「三輪苦」「淨智妙円自空寂」「無事省縁」「静座体究」「盛風力」「生滅々己」「寂滅為楽」「五戒と十戒」などである。

四、仏教の要句

1、示現流

示現流の流名は「法華経」の次の経題「妙方蓮華経観世音菩薩普門品第二十五」のなかの最後にある次の経文からとり出したものである。

「爾時・持地菩薩・即從座起・前白佛言・世尊・若有衆生・聞是観世音菩薩品・自在之業・普門示現・神通力者・當知是人・功德不少」⁷⁾

「世尊よ。もし人々が是の観音さまの自由自在のおはたらきと、三十三に身を変えてあまねき門に至らざるなき観音さまの神通力を、今お説きくださった仏の諸法のままに認め、信じるならば、この人の受ける功德というものは、決して少ないことを知るでありますよ」⁷⁾

「衆生には、能力の劣った者もいればすぐれた者もいる。ありとあらゆる能力、環境を異にした者がいる人間の能力、生き方は千差万別である。その千差万別の人間に教えを説くには観世菩薩が自由自在に姿を変えて応現しなければならぬ。たとえば仏身となって救うべき人がいれば、菩薩は仏身に姿を変えて説教する。そこで仏身、縁覚身、梵王身、帝釈身など、ありとあらゆる三十三身に応現して教えを説くのである」⁸⁾

以上原文と解釈を上記したが、そのなかの「若し衆生にして、この観世音菩薩品の自在の業たる普門示現の神通力を聞く者あらば」の文章のなかにある「示現」をとり出したのである。人間に教

えを説くために菩薩が自由自在に姿を変えて応現するという意味である。

法華経は仏教の教典の中で最も重要であり、よく知られている。同経は大乗經典の一つとして紀元1～2世紀頃インドで編纂され、三世紀頃中国で漢訳された。そのなかで定評のあるのが鳩摩羅什記の『妙法蓮華経』である。

法華経の構成は28章からなり、1章から14章までの前半を「迹門」。後半の15章から28章までを「本門」とよび、二部門に分けている。迹門では諸仏が普遍的な意味で究極の教え（法門）を説き表し、それは宇宙の統一的真理である悟りに達するための唯一の教えである。本門では釈尊の教化が実は永遠なる教化であることを説き表しているのが主題である。つまり久遠釈尊（永遠の昔から佛になっていたということ）の教えに生きる菩薩たちの仏道の歩みを明らかにしたものである。⁷⁾

示現があるのは後半の本門にある25品が前記した経文である。第25は法華経28品のなかの第25番目ということである。⁷⁾つまり「妙なるみ法、清浄にして美しき宇宙の眞実を説いた蓮華の教えのなかに観音さまが普き門より、一切の人をお救いになるお経」⁷⁾妙法とは、妙來が説いた妙なる法で法は支持する、保つなどの意味があり、この世界を支持し、一切を保つ宇宙の眞理、大自然の法則の意味である。蓮華は仏教では特別に象徴的な意味をもった花である。清浄にして美しく永遠の生命力がある意味である。普門品の普はあまねきということに到るところという意味であり、観音さまの門は出入りの自在の門。品は品種である。⁷⁾

2, 鉢羅奢法

鉢羅奢法とは「仏教でいう胎内五位の一つで受胎後第5の7日以後出産までの間の胎児の状態をいう」⁹⁾五位とは「胎児が母胎内で発育する期間を5段階に分けている」¹⁰⁾ことである。受胎後の5段階とは、1, 受胎後の7日門を羯刺藍 2, 頰部曇は、第2週目の胎児 3, 閉戸は、第3週目の胎児で肉魂ができ、4 鍵南は、第4週目の胎児で固形の肉魂ができる 5, 鉢羅奢法は、第5週目で受胎後29日から35日目の間のことであるが

身体末端ができるとされている。つまり第5段階の7日間で身体各部が形をととのえ、その後の34週で胎児が発育し、母胎内に273日の間、はぐくまれて誕生するという意味である。第5の段階の鉢羅奢法では五智円満（仏の五種の智慧が成就していること）である意味である。¹⁰⁾

鉢羅奢法のことを当流では、月船君と呼称し当流での本体としている。これは汀江放船と一体としたもので、人生一代の言行、所作を汀江放船になぞらえて、身船我というのを戒めとし、月船君というのを悟ろうとして仏道の修業をし、悟道するところを述べたものである。

当流では流儀の意地を専ら、この月船君というのにあらわし、身船我というのを戒めとしてこれを除くのである。敵を打倒せる本源は月船君にある。月船君を本当に会得すれば、自ら汀江放船の教えにかなって技は剛強神速になる。

月船君というのは、我はまだ世に生まれず、母の胎内にいる時のくらいであり、無念無想の本体で意識のない心をいい、月船と名づけるのは胎内に9カ月胎しているので名づけたのであり、君としたのは意識がなく、工がない状態をうやまつたのである。

身船我というのは、胎内より生れ出て後に意識の工があることをいい、人は胎生の時は無念無想であっても生後は欲が生じ、心身を苦しめるのである。これは本心から出るのでなく知覚から起るので意識と名づけ、仏道ではこれを卑しむ、意識の欲や工だけで世間を渡るのを卑しんで、これをさして身船我と名づけたのである。

さて、月船君は鉢羅奢法と同意語である。例えば本書に次のように記されている。人を残らず倒す技は、当流の月船、三才、二橋、二字の味である不動の心を本体とする。母親の体内に胎生している時の鉢羅奢法の心をさしていうことで初めて死にのぞむことになる。

3, 四 門

天台宗に心術を修め、悟道を得るのに四門がある。すなわち有門、空門、非有非空門、亦有亦空門である。これは、当流の初段（汀江放船）、二段（三才）、三段（二橋）、四段（二字）の境地に

相応する。この四門を借りて当流の意地を述べるのである。

天台宗では釈尊の一生涯の説教を内容・形式によって四種に分類したのが四教四門である。藏教、通教、別教、円教の四教と有門、空門、亦有亦空門、非有非空門の四句門のことで、もののあり方を分ける四種の範疇のことである。

「有り」「無し」「有りかつ無し」「有に非ず無に非ず」と四種類の表示法である。⁹⁾

当流では、四門を下記のように説いている。

有門とは、森羅万象から人間の身上に至るまですべて実体のあるものであり、天地の間に充満しているものである。そこで人々は心に憂患辛苦がなくなるように戒律を保つように修行する心である。当流でいえば、有門は身を守り、打とうと思う敵があり、自分がある世界である。

空門とは、森羅万象が天地間に充満しているといっても、それは空から生じたものであるので変り易く、夢幻のように空にかえるものである。それぞれ森羅万象は、もともと空なるものであると見破り、富貴官禄を塵芥のように軽く思い、自分の身はないものと思ひ悟道するとして修行する心である。当流の空門は身を捨てて心一つで敵を打ち倒す意地である。

非有非空門とは、森羅万象から人間の一身に至るまで空であり、実体も頭もないということである。これを強いて虚空とみて払い除こうとするのも又、心の細工であり、心の不安を免れることはできない。また有とすれば昨日はあったが今日は空となり、明日の変化は今日よりも変りやすい無常の世であり、一切は夢幻のように空から生じ空に帰す。そこで天地の間のことは、人身をはじめとしてすべて、ただ仮に形を顕わしたまでのものである。これを実体としてみて心を悩ますのは、愚かなことである。だからといって何もかも空だと見破り、悟って心を安らかにしようとして、このように有とみようとする。そのためにも心を悩ます。動かない空をみるためにも心を悩まし、結局悩みを脱する不動の境地を求めようとして仏道を修行するためにも非有非空門という部門を立てたのであろう。

当流では有でも空でもなく敵の千変万化の技に応じて細工なく無心に打つのである。敵の技に應じるのは有である。無心で打つのは空である。

亦有亦空門とは、非有非空門と関連して解すれば非有といっても空を含んでおり、非空といっても有を含んでおり、二つであって一つでない。一つでなければ心が動いている。これでは悟りを開くことはできない。天地の間のことを有とみれば、すべて有であり、空とみれば、すべて空である。有とみても心を動かさず、空とみても心を動かさず、そして有とみ、空とみる。その境は何ものがこのようにみせるのか、我も知らないということである。極意とは、有を有とみ、空を空とみてその心が大盤石のように動かないことである。

当流では有か空か自分は知らないという心である。当流で打つ、打たぬはすでに心にない。たとえば自分が寝ついた時の心は、寝ていても寝ていなくても知ることはできない。目覚めて後にはじめて寝ていたことが分る。そのように敵に向かう向かわないかは自分の心にはない。敵を打ち倒してはじめて敵を打ち倒したところを知るのである。我が心があって我が心を知らなければ、自分は鬼神となり、鬼神の技は雲躍のように神速である。

4, 六道, 刀の柄, 譬

太刀の柄の持ちかたを六道にたとえて説き、太刀をとった時の持ち味から打ちふせるまでの味を太刀の柄につけて説いているのである。そして柄の握りかたに六つの意地を示している。当流に12打があるが、この技が変化するのは、この柄の打ちかたから生まれるのである。この柄持ちの意地は、仏道の六道から考え出したのではなく、もともと柄持ちに六種あるのを、なお六種を不動のものにするために六道に準拠して定めたのである。六道とは衆生が自らつくった善悪の業によって、死後必ず行かなければならないという六つの世界で六趣ともいう。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天界のことである。

(1) 地獄界

この心は、自分のものを惜しみ、他人のものをむさぼることである。

仏道での地獄は、提婆達陀の仏が悪行を重ねる

ので釈尊が心配し、火の地獄は、提婆達陀が死去の後、生存中行なった悪事を責めるところであると教え、又浄土極楽をつくってみせ、同人が死去の後、在世中の善に報いるところであると教えた。それから同人の悪行が止んだという教えである。

当流での地獄は、上記のようなものでなく、現在生きているうちにある地獄をいう。欲心のあるものは、自分のものは惜しみ、世間にある重宝なものを貪り求め、自分のものにしようとして四六時中、忘れないでいる。人道には目もくれず、貪り求めるものが得られないと胸に炎が燃えあがるように心身を苦しめるのである。これを当流の意地にとって述べると太刀の柄と手が、つくりつけのように握られ打ち合っても微塵もゆるむことのないように強く握りこめと教えるのである。その理由は打ち合いの時、握りがゆるみ、ゆるむと又強く握りかえるので、間髪の間が生じて技が遅れてしまうからである。

(2) 餓鬼界

この心は、すべてのものを望み、欲心が満足されなければ、苦しむことである。餓はうえる。鬼は欲心が盛んなことである。この餓鬼界に有財、無財、端嚴、類劣がある。

仏道で人が死んだとき、祭るための施主がなく、水火、花香、供物、経文、呪文の手向けに逢わずに餓えている鬼を餓鬼という。

当流の趣旨は、これと異なり太刀打ちが強くなることを希求することを因とする。打ちが強くなければ、敵の太刀を打ちくたくことができずに敵から打たれてしまうのである。当流の修行者は、恋に熱中し、胸に炎を燃やすように思いをかえず、迷いの道に身をすりへらすように、片時も打ちを試み、打ちの強さを希求することである。打が強ければ技が速い、寄り足の速いところから打の変化も出てくるのである。打ちの強さは、速い技、寄り足、打の変化の三つが根本である。

(3) 畜生界

この心は、他人に恥じず、我が心にも恥じず、姿は人でありながら人でない。恥を知らない人を畜生にたとえていうのである。畜生とは獣や毛虫の総称である。

恥を知らない人は、六畜が飲食や雄雌だけを知り恥じる心がないように人道を知らず、欲で人に迷惑をかけ、自分の心を喜ばせ、人の譏りを顧みないのをいう。

当流で、これをとっていえば、恥も不覚も忘れ去って、ただ一筋の敵を追いつめ、殺人の念が強く、柄をもつ手もゆれず、手足も疲れず、精神が旺盛で何十人も殺害しようとする気持ちが飽き足りないのをいうのである。

(4) 修羅界

この心は自他を区別して戦う念を原因とする。修羅界というのは、氣質が剛気でいつも人と斗争する心が絶えず、人に勝つことを果たさないと落ちつかないのである。自分の胸に敵味方を分けておくので、この思いのために心を苦しめる人をいう。仏道では、これを賤しめ、この修羅の心を除こうとするのである。

当流にこれを用いるのは、自他の差別から人に勝つことを望み、負けることを嫌う心である。自他を差別しなければ勝負の心が薄くなる。この自他の差別心をバネにして、この心を強く養ない、敵に勝つことを求めるのである。太刀持ちを強くして天の果てから地の地獄の底まで打ち通す太刀の力を教えるのである。人と戦い勝つことを因としているので柄持ちの根本は、この修羅界である。

(5) 人界

この心は、五常の礼儀が正しく、判断力が他の界よりも勝れていることをいう。地獄などの四界は、氣質が片寄って一辺倒であるのを逆に利用して当流で用いているのである。氣質が片寄っている者同志を集めて、種類を立て、地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界と分けて、欲が深いのは、地獄界、願望が深いのは、餓鬼界などと恥しめて仏道を教える糸口とするのである。

当流にとっては、その一辺に片寄っているところを利用して地獄界では握りを強くせよと教え、餓鬼界では、打ち込みを教え、畜生界では、腕力を疲れさせないことを教え、修羅界では、その一方に片寄った意地と技を一つずつ自得したうえで、敵の変化に応じることを教えているのである。このようにして技を覚え、一片に執着することな

く、すべてに通じる技を身につけるのである。

(6) 天人界

この心は、変化が自由自在で無限の神通力を得ていることである。天人とは、儒学でいえば聖人、莊子でいえば真人の類である。天地人の三才に熟達し、人道の妙を極めたものである。それでどんな変化にも対応できて、才力の及ばないところはないのである。当流で通力自在というのは、妙技をきわめて変化自在に12打を海月のように柔軟に対応させ、一瞬の早技で打つことである。

天人界に到達することは難しいが、地獄、餓鬼、畜生、修羅の四界で精神を尽して学べば、人界は自然と生まれる。そうして人界を修行し習熟すれば、そこが天人界である。天人界だけを目がけて地獄での握り、餓鬼界での打ちかたなどを軽視すれば、一生天人界を求めることはできないのである。はじめの四界を修行し、奥の二界は四界での修行が熟したうえにも熟した後に得られる妙技で、これだけを求めて学び得る段階ではない。

以上、六道を譬喩して柄の握りについて述べた。

柄持ちを稽古する理由は、人により会得したり、しなかったりするので教法に部門を立てて、残らず教えるのである。柄を握ることに慣れ、自分の五体同様にできれば、にわかになさしめた時に自由にできる。太刀の柄を握るとすぐ自分の左右の手と同様に体の一部となるのである。

名人の技は狭い庭で技を大きくしても、太刀が木の枝葉にさわらず、八帖の座敷でも障子や活花にも当たらないのである。又握り木刀を左右に置いて暇されれば、これを握っていた流祖・重位の木刀は、指のあとができてへこんでいたという。又投げられた木刀をとるや舌や打ち合いをする稽古もしていたというのである。

5, 三毒(貧, 瞋, 痴)

三毒とは、貧(むさぼる)、瞋(いかり)、痴(情欲)のことである。三毒を断てば本心が明らかになり、仏となることができると釈尊が言ったのである。

太刀は、敵を殺すものであるが、まず自分のなかの三毒を殺し、心を強く正しくして太刀をとり殺せというのである。当流は、生死を決断する時、

少しでも生を貪る心があると煩惱の火宅を出ることができず、六道柄持の教えも無になり、敵に打ちとられる。瞋は、いかると読み、常に怒気にくらんでいることである。仏道では、この心を除かないと悟道できないとして戒めているのである。当流でこれを教法とするのは、怒気でくらんでいるのに更にくらみ加わると敵と対した時、正確な打ちができなくなるからである。痴は、思い切りのないことであり、一刀両断する果敢の心がないことをいう。知徳があっても物の道理を決断する義の心がなければ、徳を積むことができない。それで仏道では、これを戒めるのである。痴を小事のうちに切断しなければ、大事にのぞんだ時、心が迷い乱れ、情欲のために名を汚す。それで当流の修行者が痴の情を切断しなければ、敵と対した時、有財餓鬼に陥り、敵に打たれるのである。

三毒を除去する方法は、常に心の利剣(煩惱や悪魔を打ち破る仏法の力)をみがき、一瞬の間も三毒を胸中に宿さず、切り捨てるべきである。善行をしても人が知らなくとも気にせず、気にすると貧欲となる。芸が人よりすぐれなくても悔いる必要はない。悔いと怒となる。貧乏にせまられても嘆く必要はない。嘆きすぎると愚痴となる。自分に手向かう者を打ち倒す剣術よりも、我が身を支配する本心を害する三毒を切断する正義の剣術を学ぶべきである。

6 左臂切断

禪宗二祖、慧可(487-593)が、嵩山少林寺にいた達磨大師に仏道の悟りを開こうとして、自分の左ヒジを切断した故事にちなんだ語句であり、これを当流で借用し、当流初段の名称にしたのである。

当時は、禪宗という仏教の新しい宗派が中国人の現実的な世界観と結びついて中国で発展した。禪宗の信徒は、仏性は誰でもあり、修行と座禅によって規則正しい生活をしていれば、誰でも解脱の境地に達することができると思っていた。ということは、輪廻転生をはてしなく繰り返さなくても、この世で仏者の目標である解脱に到達できることを意味したのである。¹¹⁾

当流初段を左臂切断と称し、これに含まれてい

る立、双、越の三打は、自分の臂を用心して敵の臂を切断する打法である。

左肱切断とするのは、臂という文字は、発音に揺れがある、ピーという音がイーという音に変化して聞こえるので用いないのである。それくらい発音についてまでも忌み嫌うのである。トンボの構えの時、ヒジは釘で打ちつけ、そのうえ縄でくりつけたぐらいにしてヒジを動かしてはならないというのである。

当流二段は、横指横切と称しているが、この名称は技だけを示す文字である。しかしこれに含まれている寸、満、煎の三打は、左肱切断の技や意地である。二祖の断臂の時は、悟道しようという意識があり、断臂の時は無意識になっていたのであるが、これと同じように敵を打ち倒そうという意識がはじめに生じ、そうして打ち倒す時には、心底から無意識になり敵を打ち倒すのが眞の味である。このように左肱切断の語句の示す意味は深いのである。正法眼蔵（宗の文慧宗果が編んだ公案集である。公案集というのは、参禅者に示して座禅工夫させる課題で、古徳の言行を内容とする難問が多い。同案は、1147年に成る。道元が門下のために仏法の真髓を和文で説いた書）¹²⁾を伝えた後、嵩山少林寺に留まり、面壁9年の後、死去した。禅学を開祖し、その後六祖・慧能和尚の時に盛んになり、宗果和尚の時に最も栄えた。

開祖・達磨大師が述べるには、「ふりゅうもんじ不立文字、じきし直指人心、けんしょうじょうぶつ見性成仏」。六祖はいう「本来無一物」。宗果は「寂然不動」と述べた。又本書の著者である久保は「平常も貧賤、憂苦、禍福、寿命に心を動かさず、自分の身を天命に任せておく。これも当流の教外別伝として大事である」と述べている。

不立文字とは、「真理は文字に表わせない概念で規定しうるものではないということ。普遍的な命題の形で立言しない、またそれにしたがって行動しないという意」⁹⁾

直指人心、見性成仏とは、「いたずらに眼を外界に向けることなく、自己の心をまっすぐにつかめ、考えたり分析したりすることなく、むずとつかめ、そうすれば自己自身が実は仏そのものであったことを徹底して知り、そのまま仏となるだろうという意味。煩悩な教学にとらわれないで、

人間が本来もっている仏性を直ちに体得せよということ」⁹⁾

本来無一物とは、「もともと実体のないこと、空。本来からいえば執着すべきものは何もないはずだということ」⁹⁾

寂然とは「心が静かに澄みきっていること」⁹⁾

教外別伝とは、「経文などの言語にとらわれずに、その精神に端的に達すべきことをいう。後には、深義は言語によらず、心から心に伝えられることをいうようになった」¹²⁾

達磨大師は、禅学伝心の要諦について、因果応報を信ぜず、直指人心を仏法を会得しなくても本来面目にあることを説き、人に本然の良心を失わないようにして、その性を守り育てることを教え、宗果は経典を読み、会仏を唱えることを信ぜず、静坐体究に務めた。これらの言葉は、どれも皆高遠な理念である。当流の技を工夫するののもこれと同じであると本著者は述べている。

7, 三千大千世界

三千大千世界とは、「一仏の化尊の区域、即ち一人の仏が出世して教化を施したもう範囲。三千大千世界は中千世界を千合したもので、中千世界は小千世界を千合したもので、小千世界とは須弥山を中心として鉄圍山を外廓とし、その間に七金山、七香水海を繞って塩海となり、四州ありて鉄圍山がこれを囲む」¹³⁾

当流伝書では、東西南北上下を界といい、過去、未来、現在を世といて時間、空間の廣大無辺なことをいう言葉である。満の打ちの氣象の大きなことをたとえるものがないので、母の胎内から生まれ出る時の心をくみとってたとえとしたものである。

開けば則ち三千大千世界に満つと註したのは、「満」という技は意地も技もたいへん広大であるからである。これを第二に出したの「寸」は追いつめられた時の打ちかたであり、その技が小さいので母の胎内にある時の意地をとって第一に順序づけ、満は広大な技で太刀先が十分にひろがって敵の左臂が動く先を抑え打つ技なので、母の胎内から広い世界に生まれ出る時の意地をとったものである。それで寸の次にこの満の技をおいたの

である。開とは心を拡大にするという意味である。

人間が母の胎内の胞衣に包まれ、三つの輪に身を縮めていたものが生まれる時、広大な天地の間に生まれ出たときの心を考えてみるとよい。その心は明るく照り輝いてもっとも気象が広大な極致を得ることができる。この気象には、どのような名剣でも足に当たったら踏み折ってしまう勢いがこもっている。心が空であり、ただ生まれたたりの胎内にいた時の五位の仏智をそのまま備えた気象だからである。

この気象があるからこそ、引き抜いた太刀を蜻蜓に構え、何の意識も計らいもなく、するすると近づき、敵が太刀を振りあげようとして左臂を動かす先にそれを切断してしまうのである。

8、火宅を出る

火宅とは、煩惱と苦しみに満ちたこの世を火に焼けている家に喩えていう。炎に包まれた恐ろしい世界から抜け出ることを火宅を出るといふ。⁹⁾

火宅を出るといふのは当流二段のなかの「煎」という技の打ちの意地を悟らせるためにここにのせたのである。煎の意地を悟るといふのは意識を消し去って心を平静、明快にするのである。

具体的に述べると火宅とは、自分の目耳鼻舌身意の六根の欲望のために、心が苦しむのを火が四方から燃えてきて、家の中には困難となることをたとえたものである。出ようとしても四方から燃えてきて、大火なので消し去ることもできず、これから逃げ去ることもできないので心が苦しむのである。つまり生命を保とうとするので苦しむのである。それよりか身を火の中に投げ捨て死のうとすればかえって心は安楽になる。

当流で上記のことと兵法のことについて、次のように説明している。

火宅の火は、六根から生じた相火をいう。悟りというの、智慧が出て物事のけじめをきわめて、善悪の区別を定めるので意識のために心がくもることがない。相火は自然と消滅して心の輝きが盛んになり、常に安泰である。これを火宅を出るといふ。

心火とはどんな凡人でも理非を区別する心を行い、相火は前述の如く心が常に意識のために苦し

むことである。

この心火と相火が、常に胸中で戦っているのが心が安らかでなく、危難の場に対すると意識の相火が盛んに燃えて心火は衰えるのである。それで心の光は、光明を失なうというのである。しかしながら天受の心火であるので、全部消失するのではなく、なお戦い双方ともかすかになって戦い苦しむのである。

当流での敵との戦いにたとえると、当流の教えを守るために意識を除こうとして、振るい起す心の勇は心火である。しかし悟りを得ずに敵の太刀先を恐れるのは相火である。二つの火が争う時、わが太刀は遅くなって敵に打たれるのである。

このようにならないためにすぐに心火を盛んにし、相火を消すことはできないので、死ぬことは同じとみて相火を燃焼させ、わが心を焼き尽して無理にでも敵にかかるのである。そうなると争う一方の心火は消えて相火だけが燃えさかる。しかしこの結果胸中に両火が争う苦しみはなく、心は死を決定して安静になるとかえって相火は、消えて心火に変るのである。心の決断がこのようになると不動の心となり、体に生身の人ではあっても心は死んで神となり、天の真理と一体となり、意識は自然と消え鬼神となり、仏体となるのである。これを火宅を出るといふ。

煎を学ぶ学士は、この理を工夫すべきである。相火をいやがうえにも燃やして心を焼き尽すというのは、いのちは捨てても太刀を忘れない心があるので、これを残念に思いただ一つの節操に殉じ、忠義を守り、勝敗を思わず、当流の太刀筋の意地も忘れて、丸裸になって向かう気象をいうのである。

9、重類、傍布（傍生）

重類とは人間であり、傍布とは鳥獣である。人間、鳥獣といわずに重類、傍布というのは両者の意味を納得させやすいことから仏説を借用して教えているのである。

重というの、仏教の地水火風空の五大（一切の物質に偏在して、それを構成するものとみて大という。密教では物質構成の要素である五大を円輪に擬していう語である）を縦に重ねたものをい

い、傍布とは五大を横に敷いたものをいう。

類というのは、地水と風空の陰のなかに火の陽があるという原理で、陰陽（中国の易学でいう相反する性質をもつ陰・陽二種の気、万物の化成はこの二気の消長によるとする）がそなわったものである。このように意味の同類である。

傍布とは類を重ねず横に敷いて類を別々にする意味である。つまり人は天地の正気をうけて生れるので上に天を頂き、下は地を踏んで体が真直に縦に立っている。それで五臓も肺・肝・心・脾・腎と縦にならんでいる。

鳥獣は天地のかたよった気をうけて生れるので天を後に頂き地を前に踏んで臟腑を横に並べている。それで人は重類、鳥獣は傍布とするのである。

五臓にある火のなかで心臓は特に陽気が盛んで火も盛んである。五輪もまた、陽気の火が必要であり、空風火水地を重ねたものである。類を重ねたのは空風水地の各々が火の光明をうけて勢いを増し、逆に火も又空風水地の陰火を得て、補助的に火気の力を得て更に増大する。人は重類なので心の火が、空風水地を貫いて勢いを添え、逆に空風水地が心の火を助けて五大が一つになり心の火が広大になるのである。

鳥獣は傍布なので心火が空風火水地を貫くことができず、五輪が別々に離れて、四輪が心火の光明を助け合うことができないうので微小である。それで愚かといえるので鳥獣は人と対応できない。傍布の生物という意味から傍生ともいう。（体を横にして生きる生物、畜生）¹²⁾傍布は心が微小であるので心をもたず、人は空風火水地を縦に重ね、その形体は仏体と同じで悟りを得ることができる。

つまり当流は工のない心の芸なのでよく変化し、他流は工のある手足の芸で心の技を用いないので変化がなく当流に対応できないのである。

当流で重類、傍布のことを述べるのは、当流と他流との区別を述べて、当流に他流の剣術者は対応できないことを述べるためである。重類を理解すれば、心で敵を打つことになる。心とは自分も自覚できない無心の味である。それでどのような

変化にも即応できないことはない。心の光は敵の隙を照らし、見抜かないことはないのである。

本体の無心を会得するためには、当流の技に習熟し、敵と対したときはこの技を忘れて胸中には一物もない空の心境で打つべきである。この一打には当流の技と意地が含まれているのである。これが重類の心であり、太刀はよく変化し、当流個々の技の形にこだわらずに変化に応じて打つと教えているのである。

10、入星・仏心・見顕

入星・仏心・見顕は釈尊が雪山で12月8日の暁に明星をみて仏教開眼の秘訣のことばである。釈尊は六年間雪山に正座して悟りの世界を開いた。当日、月は西に入り、陽はまだ現れず、まだ暗い時、明星がきらっと出て釈尊があっと思ったとき、胸中には何もなかったのである。その時釈尊の心に明星がすっと入ったのである。

明星は五行（古代中国の説で、五つの元素である木・火・土・金・水の総称である。人間の生活に必要な五つの材料、また宇宙、人生のすべてを説明する原理）の金星であって昼夜、天地の間を循環する第一の星で、天地、山川、人間、草木を照らしこれを生育させる神である。

そこで釈尊は、形は人間であるが、心は明星となったのであり、万物の道理を悟らないことなく、それに通じないことはなくなったのである。これは何も特別な術を用いたのではない。ただ、あっとして胸中に何もなく、自然に星の中に心が入っていったのである。

これを当流に紹介したのは、意識を除いて純一念で打つことが大切であるからである。意識を捨てるのが真の重類として人間であり、そのとき心は明らかに照り輝いて敵を打つことができるのである。意識を捨てなければ形は人間でも心は傍布の畜生で、心は暗く敵に打たれてしまうのであり、意識を捨てるか捨てないかが、まことに大切な生死の境になるのである。敵に対した時、胸中には何物もなく、ただあっと見たままに打つのである。

引用文献

- 1) 久保七兵衛紀之英, 示現流開書喫緊録, 手書 1781
- 2) 同上, 示現流開書喫緊録系図, 手書 1789
- 3) 今村嘉雄編, 日本武道大系第3卷, 同朋舎出版 1982
- 4) 東郷重位, 兵法書, 手書 1624頃
村山輝志『示現流兵法—史料と研究—』所収
- 5) 同, 兵衛察見 手書 1639, 同所収
- 6) 同, 兵法切紙 手書 1621, 同所収
- 7) 前田孝道, 絵説法・観音経を読む, 朱鷺書房 1994,
p. 18, 19, 140, 212, 216, 218
- 8) 鎌田茂雄, 法華講話下 講談社, 1986, p. 140, 141
- 9) 中村元, 仏教語大辞典, 上, 下巻, 東京書籍, 1975,
p. 69, 509, 510, 580, 1096, 1174
- 10) 岩本裕, 日本仏教語辞典, 平凡社, 1988, p. 251
- 11) 鈴木博訳 儒教, 青土社, 1994, p. 65
- 12) 新村出, 広辞苑 岩波書店 1988, p. 618, 1284,
2185
- 13) 河村孝照, 天台学辞典, 国書刊行会, 1990, p. 115